

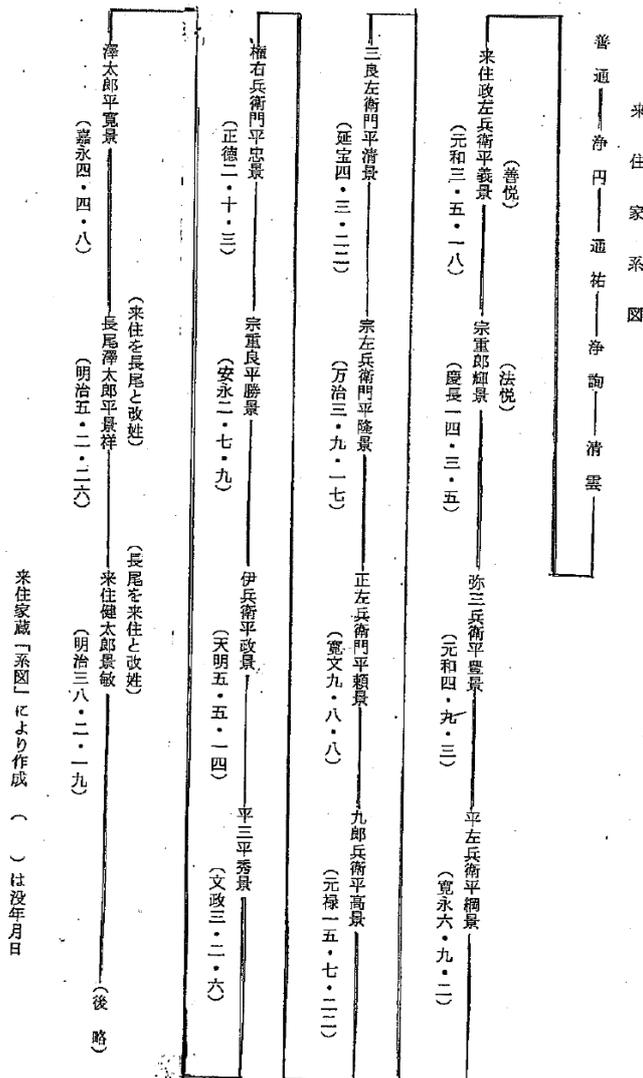
きしゅうほうえつ にっしん
来住法悦と日禰書状に関する考察

日本先史古代研究会 会員 井上秀男

1. 来住法悦と浦伊部について

JR赤穂線伊部駅から宇野バスで浦伊部で下車すると片上湾の近くから入った所に太閤門がある。来住法悦が建築したと伝えられる、近くに来住家の菩提寺の妙圀寺がある。浄光山妙圀寺は堀河帝の永長年間(1096~1099)多田満仲 5代孫多田明国の創建と伝えられる古刹で貞治5年(1366)天台真言の両部から日蓮宗に改めたと伝えられている。浦伊部は、以前は和気郡浦伊部であった。現在は備前市浦伊部となっている。この地に戦国時代から江戸初期に活躍した豪商の来住法悦がいた。来住宗重郎平輝景で(~1609)諱は重治、号は掬圓斎と名乗った。来住家の由緒書によると祖先は讃岐国高松の牢人で来住政左エ門平義景の子供、来住法悦の時に浦伊部に来て、今までの長尾姓を改めて来住氏を名乗ったとされる。詳細は定かでない、姓氏研究等の本には苗字と地名は共通の場合が考えられるとのことで大日本地名辞書(吉田東伍著)で四国の讃岐の条を開き調べてみた。香川県には長尾姓も多くあるという姓氏辞典を調べる方法もある。地名辞典に讃岐国寒川郡の条に長尾郷、長尾村が記されていたが詳細なことはわからなかった。来住氏については播州国加東郡に来住村として江戸期の村名として地名辞典に記されている。来住(きし)と呼んでいる。貴志荘(きししょう)として鎌倉期~南北朝期に見える荘名とある。来住氏に関する文献として播磨国後風土記第七卷、古城の部に来住城あり、加東郡来住郷来住村と見え、城主多田満仲の末裔として、来住安芸守景政子源三郎景利皆武勇也……云々後略す……と見え浦伊部の来住家との関係があるかどうか調査研究をしてみないと定かでない。

来住家系図



2 来住法悦と豊臣秀吉の関係について

天正 10 年(1582)3 月の来住家文書に羽柴秀吉からの禁制をもらっている。この 5 年前の天正 5 年(1577)10 月、織田信長は中国攻めの決意をして羽柴秀吉には播磨を、明智光秀・細川藤孝等には丹波・丹後を攻略させ、山陽とさんいんの両方面から毛利氏を攻める作戦を立てる。羽柴秀吉は姫路城を根拠地とし毛利氏に属する諸城を攻め 11 月には播磨を大体平定し天正 8 年(1580)正月ごろ、別所長治の三木城を攻略し 5 月には但馬を平定し、次に因幡に入って毛利氏の将の吉川経家の守る鳥取城を兵糧攻めで天正 9 年(1581)10 月開城させた。そして秀吉は備中攻略の準備を整えて天正 10 年(1582)3 月、播磨・但馬・因幡 3 カ国の兵をひきいて姫路城を発し、5 月毛利方の将、清水宗治の守る備中高松城を包圍して、俗に伝えられている「備中高松城の水攻め」である。この頃来住法悦は、高松の役の帰途に秀吉が来住家に立ち寄ることを約束していたので、秀吉を迎える為に御殿と門を新築したと言われている。しかし天正 10 年(1582)6 月 2 日未明に明智光秀が京都の本能寺で織田信長を殺害した本能寺の変である。この知らせ得た秀吉は、直ちに京都へ馬を走らせる。俗に言われる秀吉の「大返し」で結局浦伊部の来住家に立ち寄ることが出来なかった。築造された御殿は来住家の菩提寺の妙園寺の客殿として寄進されたが、太閤門と石垣は 400 年後まで風雪に耐えたが、老築化が進み地元の人達による保存会が設立され、現在は太閤門の由来を書いた石碑が建立されている。

3. 来住法悦と宇喜田秀家

豊臣秀吉の養子宇喜田秀家が岡山城を修築する時に来住法悦は用銀の調達や一棧寄進する等の支援をしている。又、宇喜田秀家からの岡山城下に材木町一町をもらっている。(来住家関係文書参照)文禄 3 年(1594)には國中諸役免除の特権を受ける等宇喜多氏との関係も深いものと受け取る。法悦は慶長 6 年(1601)に岡山城下の家を売り払って浦伊部に住し、妙園寺の再興や京都の常寂光寺の建築に尽力を注いだ。

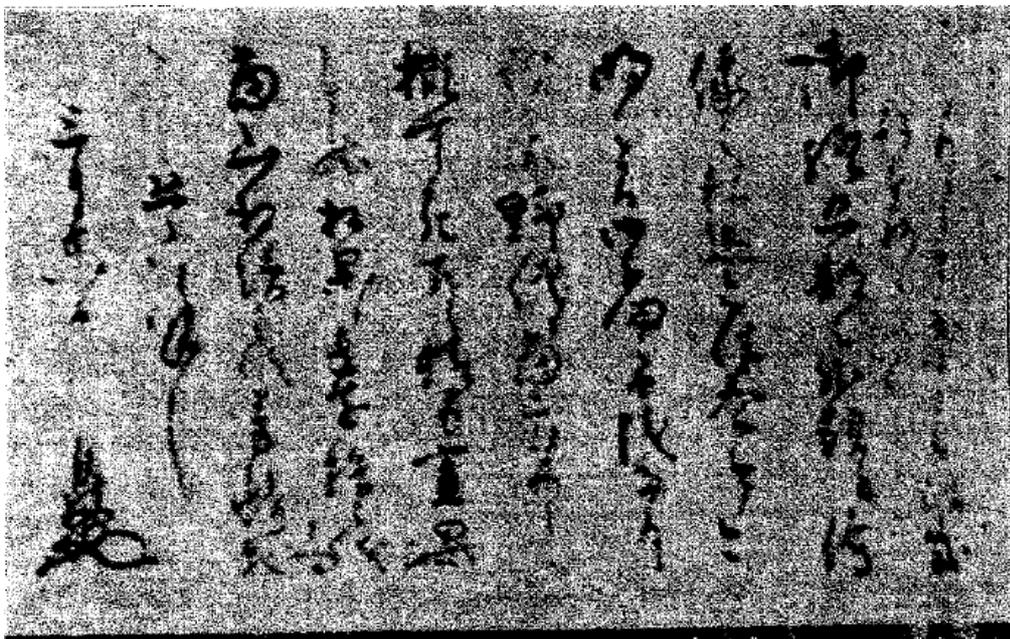
4. 日禎(にっしん)書状と日奥(にちおう)不受布施派の祖と大阪城対論

日禎(1561~1617)は日蓮宗京都本国寺の第 16 世で京都における日蓮宗の中心人物の一人と称され、究竟院(くきょういん)と号した。来住法悦宛及び来住家に関する文書が岡山県立博物館へ 18 通所蔵されている。文禄 4 年(1595)豊臣秀吉は諸宗に方広寺大仏の千僧供養会への出仕を求めた。しかし日蓮宗には不受布施の宗制があつて法会に出仕することは、封建権力に屈して宗制を破ることである、この法会に日蓮宗の僧の出仕の可否をめぐる教団内に対立が生じた。このとき不受布施の厳守と不出仕を主張したのが京都本国寺の日禎と、もう一人日蓮宗不受布施派の祖である日奥(1565~1630)安国院仏性院と号する僧で、永禄 8 年(1565)生まれ京都町衆の豪商の述藤兵衛の子で京都妙覚寺 20 世日典(にってん)につき出家し日典は日奥の資質を高く評価して文禄元年(1592)に京都の妙覚寺を日典から与えられた。日奥は千僧供養会には不出仕を主張して受け入れられず妙覚寺を退出して丹波小泉に隠栖したのである。

当時の日蓮宗教団の受・不受の対立は教団を二分する重大な問題であつた。その後豊臣秀吉没後、慶長 4 年(1599)に徳川家康の命で、大阪城で受派の妙顕寺の日紹・日乾等と不受布施派の対論が行われた有名な「大阪城対論」である。あくまで不受布施派を貫徹を主張する日奥は慶長 5 年(1600~1617)まで対馬に流刑された。

5. 来住法悦あて日禎(にっしん)書状について

書 状 A



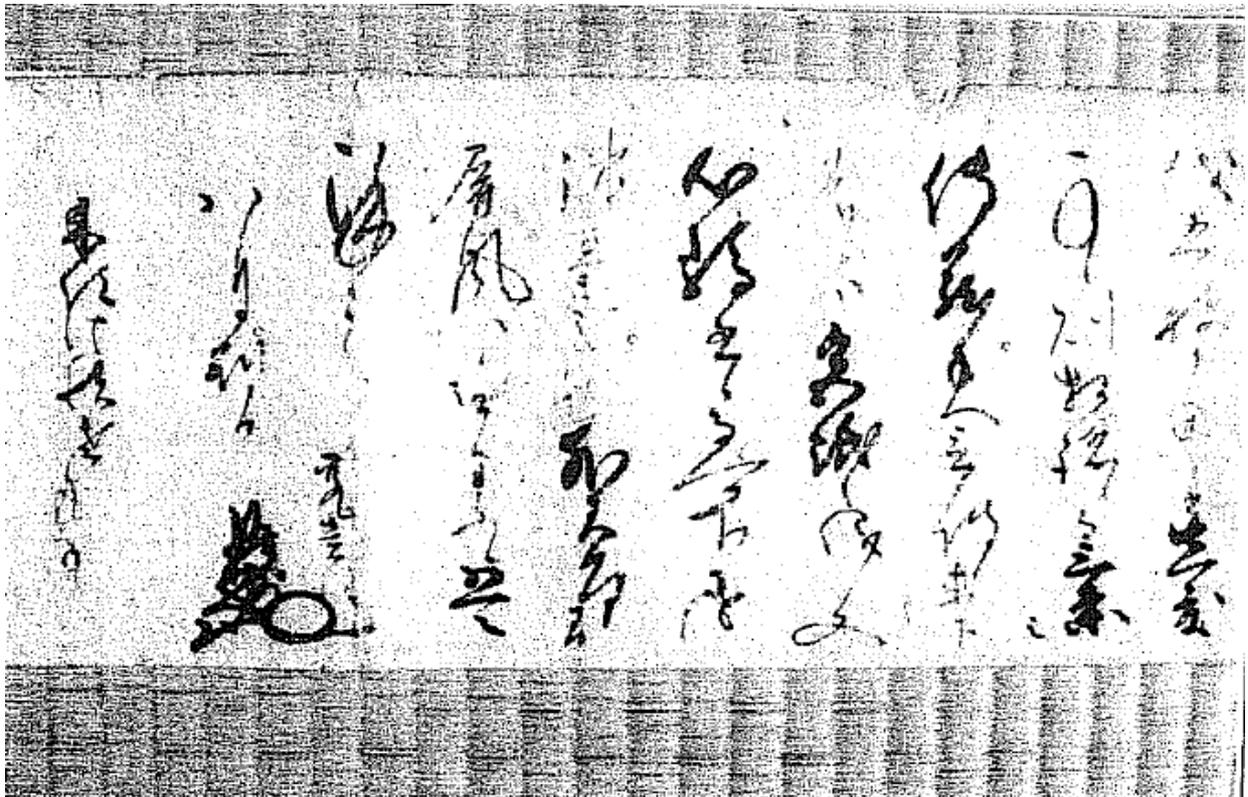
日蓮宗の僧、日禎も大阪城対論で権力に屈するのである。そして京都の本国寺を退去したのが慶長 5 年(1600)の 4 月末

頃であろうと伝えられている。京都嵯峨野に隠退したその地が常寂光寺である。本国寺を離れるその頃の動向を知ることの出来る書状で、来住法悦あて日禪書状が上記書状Aである。文書の内容は岡山県立博物館所蔵文書の 33 ページの「日禪書状」として解説しています。文面は「自分は今年中に死ぬかもしれない、精力も尽き果ててしまったので自分が死んだ後は寺の相続のことについてくれぐれも頼む」と書いてあり、文面の当山とは京都の本国寺の意味であれば、日禪が大坂城対論で権力に屈して本国寺を出る頃の手紙と考えられ、来住法悦と日禪の親交の深かったかを知る文書の一通である。この文書は岡山県立博物館の館蔵優品図録 103 ページ(73-A)の文章を参考にさせて頂いた。

6. 私の初見した来住法悦 あて日禪(にっしん)書状

私事で恐縮ですが、私の亡き父(以後父と記す)は郷土史が好きで、考古学・城郭・社寺・氏姓研究等を常日頃から調査して雑記帳等に資料を残し貴重な郷土史本を大切に保存している。他界する数年前まで読書したりして日々を送っていた。90 歳までの長寿を全うした父であった。私もその様な父の後姿を見て郷土史に対する関心が芽生えた様に思う。休日には本屋に行き郷土史に関する本を探しに行ったり、図書館へ足を運んだり歴史の研究会へ参加し色々な分野の先生からご教示を戴いた。そうしたある日の事、今から約 20 年前ぐらいになる、父が箱の中から一枚の古文書と雑記帳を取り出して私に見せて説明してくれた書状が浦伊部の来住法悦へ宛の初めて見る日禪の書状であった。

日禪(にっしん)の書状 写真B



7. 来住法悦あて日禪(にっしん)からの補任状

写真Bの書状は父が昭和 35 年頃今から 50 年前に和気郡和気町衣笠でその当時に古物商をしていた八幡網治氏から買ったものと話していた。その時もう一枚の書状が店にあったのが日禪から来住法悦への補任状であった。この補任状は買わなくて、八幡氏の了解を得て書き写させてもらったと話していた。その記録帳には、昭和 35 年 8 月 10 日八幡網治宅にて写すと年月日が記されている。その補任状の書き写しは次の文書Cです。(原文は縦書きです)

南無妙法蓮華經
 来住法悦沙弥
 日住 花押
 右依為佛法之志異他仁
 所授与日文字如件
 天正十二年甲申曆夷則八日

この補任状は、来住法悦の嫡子来住弥三兵衛に日禪から永禄年間(1592~1596)に与えられる前の約10年前ぐらいに書かれた補任状と思われる。実物の文書であればと考えますが、父の書き写していただいても大切な資料として保管しておこうと思っています。日禪からの補任状についての資料は岡山県立博物館 研究報告2 昭和55年3月の来住法悦関係文書の中で日禪書状が18通所蔵されていると記されている。日禪が補任状として書いているのは法悦の嫡子の来住弥三兵衛平豊景へ宛ての文禄(1592)□□曆7月○日の書状一通で他には見当たらなかった。父がその時来住法悦への日禪からの補任状を買っていたら今現在残っていたかもしれないと思います。

8. 来住法悦あて日禪書状と竹林栄一先生との出会い

私は倉敷中央図書館にて岡山県立博物館研究報告2 昭和55年3月の資料に「来住法悦関係文書」が書かれているのを知り執筆者は柴田一先生と竹林栄一先生でした。平成4年頃の時、その当時に学芸課長として勤められていた。私は竹林先生に電話にて「私宅に来住法悦宛の日禪からの文書を保管しているので調査確認をしてください」とのご連絡させて頂き、後日来訪され書状を確認してもらった結果、「間違いない」との事であった。来住家文書等について色々教示してもらおうと共に、書状をカメラに収めて帰られた。数日後竹林先生からのお手紙を頂いた。和紙に毛筆にて達筆でお礼の文面が書かれていたのが印象に残っています。それとこの時に竹林先生が「来住法悦あての日禪書状」と題して朝日新聞に記された新聞の切り抜きを同封して頂いたのが、文面中の書状Aです。

今回仮称「きび」考の22年秋号季として寄稿するに当たり、テーマを色々考えた結果、日本先史古代研究会設立の場所が備前市伊部の地であったので、伊部地域でのテーマがあればと思いついたのが浦伊部の来住家文書を参照して文章にしてみようと思いついてみた次第です。今から400年前の古文書から当時の人達の動向を知ることが出来る。その土地の古文書や郡・町・村誌を大切に保存して行くことが重要な点と感じられた。今回寄稿させて頂いたのですが、文面に於いて誤字等お気づきの場合にはご指摘して頂ければ幸いと存じます。

参考資料及び文献資料

- 岡山県立博物館 研究報告2 昭和55年3月「来住法悦文書」
- 国史大辞典
- 大日本地名辞書三巻 吉田東伍著



太閤門の碑文



筆者井上氏と太閤門

石垣は400年前からの来住法悦家の石垣

広大な屋敷跡が旧街道に沿って残っています。この屋敷の裏山の山麓に法悦が寄進した妙閣寺の客殿が今に伝えられている。豪商来住家は今日の大手商社格と井上氏は語ってくれた。(平成22年9月2日) 撮影 山崎泰二